

「若水」とは、新年に初めて汲む水のこと。
その水を汲みにいくことを「若水迎え」といいます。
お正月には一家の長（年男）が若水を汲み、まず年神に供え
その後、煮炊きに使い、家族が共に清い水をいただきます。

若水は古来より「^{おちみず}変若水」、
つまり強い生命力を持った若返りの水と信じられ
新しい年を迎えるために重要なものだったのです。
元来、平安時代に宮中で立春の早朝に汲む水を若水といい、
一年の邪気を払うといわれました。
民間に伝わり、元日に汲む水を若水と称したのは
江戸時代になってからです。

ふるさとの風
平成三十年 睦月

天から遣わされた水

—^{み も い}御水—

^{かみのみいの}上御井神社・^{しものみいの}下御井神社

元日や神代のことも思はるる

荒木田 守武

元日、午前零時、伊勢神宮神楽殿では一番神楽が始まる。
その頃、斎館から二人の神職が桶を手に提灯の明りの元、若水を汲みに森の奥の井戸へと
向かう。^{さいたんさい}歳旦祭にお供えする御水をいただくためである。

歳旦祭は新しい年の初めを寿ぎ、祝う祭。一年で最初に^{おちみけ}大御饌を神様に^{たてまつ}奉る儀式である。
豊受大神宮（外宮）では午前四時、皇大神宮（内宮）では午前七時から執り行われる。
初詣の人々で賑わう新春の伊勢神宮。歳旦祭から始まり^{げんしきい}元始祭（三日）、昭和天皇祭遥拝（七
日）、一月十一日御饌（十一日）、一月上旬の^{たいまれきほうせいほじめさい}大麻曆奉製始祭などの祭典や行事が続く。

神宮で年間に行われる祭は通常の年でおよそ千五百回に及ぶ。この中には、一年三百六
十五日、一日も欠かすことなく、朝夕二度、御饌殿において神々に神饌を捧げる「日別朝
夕大御饌祭」も含まれる。神聖な神饌を整え供えることは極めて重要な神事と位置づけら

れており、豊受大神宮（外宮）創建以降千五百年変わることなく続いているこの祭典は、朝御饌・夕御饌、或いは常典御饌（常典）とも呼ばれ、豊受大神宮（外宮）の鎮座にその起源を持つ。

豊受大神宮（外宮）の鎮座は、皇大神宮に遅れること五百年。天照大神の御饌都神、すなわち食物を司る神として豊受大神を迎えたことによる。

豊受大神宮の鎮座を伝える最も古い記録は、平安時代に神宮で編纂された『止由気宮儀式帳』(延暦二十三年(804))である。儀式帳は、鎮座伝承や御祭神、儀式、遷宮などに関することなどの報告書で、『皇太神宮儀式帳』と共に神宮の規模・祭祀の規範として古来特に重要視されたものである。

『止由気宮儀式帳』によれば、第二十一代雄略天皇の夢に天照大神が現れ「丹波の国にいる我が御饌都神の等由気大神を近くに呼んで欲しい」と御神示があり伊勢の度会の山田原の地に豊受大神を迎えられたと伝えられる。

『止由気宮儀式帳』天照大神の御神託（お告げ）

しかあれど吾一所にのみ坐せば甚苦し。しかのみならず、大御饌も安く聞食さず坐すが故に丹波国の比治の真奈井に坐す我が御饌都神等由気大神を我が許に欲りす。

〔天照大神が仰せられるには〕だが、私が一所のみに居るとたいへん苦しいのです。

そればかりか、食事もままならない状態なので丹波の国の比治の真奈井にいる我が御饌都神の等由気大神を近くに呼んでほしい。

（『外宮さんを知るための二十のことば』石垣仁久／著）

『大神宮諸雑事記』は、垂仁天皇二十五年（紀元前四年）の皇大神宮鎮座から平安時代の延久元年（1069）まで、神宮の重要事項を編年体で記録したものであり、日別朝夕大御饌の起源についても触れている。

『大神宮諸雑事記』天照大神の御神託

而じて天照坐伊勢太神宮の御託宣に称く我が御饌つ神は、丹波の国与謝の郡真井の原に坐す。早く彼の神を迎へ奉り、我が朝夕の御饌物を調べ備へしめ奉るべきなりと。

そうして天照大神宮のご託宣に言われるには、「私の御饌つ神は丹波国与謝郡の真名井原にいます。早くその神をお迎えして、私の毎朝夕の御饌を調べさせなさい」

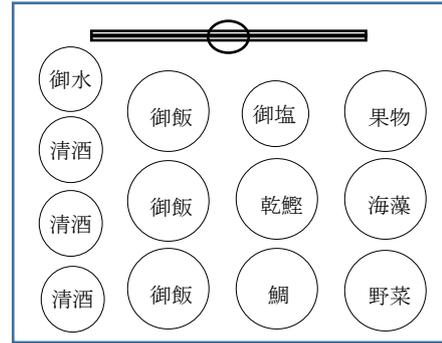
（『外宮さんを知るための二十のことば』石垣仁久／著）

日別朝夕大御饌祭を執り行う豊受大神宮（外宮）御饌殿は、正宮板垣内の東北隅にある。御饌殿には、東西に棟持柱が一本ずつあるだけで、柱を使わずに横板壁を井桁に組み合わせて重ねただけの井桜組萱葺で神宮の中で最も古い形の建物である。古代の床の高い穀物倉であった高倉の建築様式を留めており、昇降には刻御階という一本の丸太を刻んで作った階段を用いる。

殿内に設けられている神座は、皇大神宮・同相殿・同別宮、豊受大神宮・同相殿神・同別宮の六座。奉仕するのは、禰宜、権禰宜、宮掌各一名、出仕二名で、前日から斎館で潔斎し、翌日早朝五時（冬は六時）から忌火屋殿で忌火を熾すことから奉仕が始まる。

神饌は「御物」とも呼ばれ、ほとんどの御物が神宮で自給自足されている。その品目は、御飯三盛、御塩、御水、乾鯉（鯉節）、鯛（夏季はカマス、ムツ、アジ、スルメなどの干物）、海藻（昆布、荒海布、鹿尾菜など）、野菜、果物、清酒三献の九品目。そのうち御飯、御塩、御水が最も大切な御物とされる。

『伊勢神宮の衣食住』（矢野憲一／著）には次のように記されている。



(図)日別朝夕大御饌祭神饌

参考資料：『別冊太陽 伊勢神宮』／平凡社
『神饌』／世界文化社 など

延暦の『止由気宮儀式帳』によると、お供えする膳物は、天照坐皇大神の御前に、御水四毛比、御飯二八具、御塩四坏、御贄等。止由気大神の御前に、御水四毛比、御飯二八具、御塩四坏、御贄等。相殿神の三前に、御水六毛比、御飯三八具、御塩六坏、御贄等。

とあり、水と飯と塩とが主たる御料であったことがわかる。—略—この極めて質素な米・水・塩の三品が古来神宮の神饌御料として最も重んぜられていたのであり、これはとりもなおさず人間が生きていく食生活の最も必要なものであることは記すまでもない。

天からの恵みともいえる水は、神事にも欠かせない尊いものとされてきた。神に供える水は、高天原から賜ったと伝わる神聖な御水である。外宮には二つの御井の神社がある。

上御井神社は、外宮西方三百メートルほどの奥まった藤岡山の麓に鎮座する。外宮の所管社で、祭神は神宮の御料水の守護神である上御井鎮守神。ご神体は、高天原から種水をいただいたと伝わる井戸である。社殿はなく、二重の板垣に囲まれた御井覆屋が上御井を覆っている。一般の参拝者は立ち入ることはできない。

御水は毎日、この上御井神社から汲み上げられる。

早朝、浄衣を着けた常典御饌奉仕の宮掌と出仕が、森の中の小径を通って神社に向かう。長い柄のついた柄杓で御水を手桶に汲み取る。この時、神職は自分の影を水面に映してはならない。その後、忌火屋殿において御水は土器の横瓶という壺から水椀という器に注がれ、御塩と共に神饌に供えられる。この御水は神饌の調理などにも使われる。

また、伊勢神宮で醸造する神酒も上御井神社の御水を用いる。

世々を経て汲むとも尽きじ久方の 天より移す忍穂井の水

度会延誠 『風雅和歌集』

『風雅和歌集』は貞和五年（1349）に成立した十七番目の勅撰集である。

鎌倉末期から南北朝時代の歌人であり度会姓を持つ外宮の権禰宜の度会延誠は、“天から移した井戸の水は尽きることはない”と詠んでいる。

忍穂井とは、上御井神社のこと。この井戸を忍穂井と呼ぶのは、天上の御井を移したからである。天孫降臨の際、天牟羅雲命によって高天原の天忍石の長井の水が高千穂の忍穂井

にもたらされ、比治の真奈井（真奈井とは、井戸の美称。比治の真奈井とは丹後国にあったと伝えられる泉の名。）を経て外宮の御井へと移されたと伝えられる。

『神宮雜例集』の巻第一の第三「御井社事」は、このことについて詳しく記している。鎌倉時代初期に編纂されたと云われる『神宮雜例集』は、古代の神宮史料として一般に引用される貴重な文献の一つで、『儀式帳』や『延喜式』の内容を補完するうえでも、重要な史料である。

また、『宇治山田市史上巻』によれば、「明治五年六月十日、此の上御井神社を度會縣の所管に移されたので、神宮に於ては忌火屋殿附近に別に井戸を掘り、忍穂井の水を移して御饌に供する事としたところ其の後數々奇異の事があったので、同六年四月再び神宮所管に復せられた。」とあり、長い歴史の中でおきた異変も窺われる。

もう一方の御井の下御井神社は、別宮の土宮の奥、多賀宮の下方に鎮座する。祭神は下御井鎮守神しものみいのまもりのかみ わかみやで少宮とも云う。外宮の所管社で上御井神社と構造は似ているがこちらは一般の参拝も可能である。元は多賀宮の御料水の御井であった。この御井は普段は用いないが、上御井に万一の事故や穢れがあった場合の予備の井戸である。

地域の古文獻にも御井について記されている。

江戸中期の外宮権禰宜かわさきのぶきだ河崎延貞が編集した『神境紀談』には、高宮（多賀宮）月六度の朝夕の御饌で専属の物忌がお供えする御水は、この下御井から汲んだものを常用するということ、上御井が水早等の故障がある時は下御井の水を用いるということ、また俗に流水ながれみずということ、などが記されています。さらに同時期の権禰宜ききそきよあり喜早清在が著した『毎事問』によれば、流水にはかつて拝所があったようで、寛永の頃（江戸初期）に設けられたことがわかります。

（『瑞垣 238 号 こぼれ話（二）江戸時代の下御井神社』音羽悟／著）

また、大西源一氏は『大神宮史要』の中で次のように語っている。

御饌殿と共に、豊受大神宮の御創立と最も関係の深いのは御井である。其の御由緒については『大同本記』に、天孫御降臨の時、供奉の天牟羅雲命に詔して、食國の水は、未だ熟せぬ荒水である、汝今より再び皇祖の御前に参上り、此の由を申上げよと宣うた。天牟羅雲命は仰せを畏んで天上に帰参し、其の由を言上したところが、皇大神の詔に、雜の政については、遺るところなく沙汰し遣わしたが、水取る政だけは忘れていた、一度これから誰れかを遣わそうと欲していたところであると仰せられて、天牟羅雲命を搦ませられ、天の忍石の長井の水を八盛御取りになり、此の水を持ち下って、皇大神の御饌に八盛、また皇御孫尊の御水に八盛献り、其の残餘は天の忍水として、食國の水に加へよ、また御伴の神たちにも飲ましめよと宣うて下し賜うた。其の後豊受大神宮の坤の方の岡の片岸に、新しく御井を穿ち、天の忍井の水を入れ加えて、當朝の水に和し、未永く御饌の調備の料に供せしめ給うたとある。

此の御井は、両大神の御饌の御料水であるから、古来最も神聖視せられ、苟くも異状ある時は、使を遣わして祈謝せられた。位置は翠滴る藤岡山の北麓にあって、忍穂

井と呼ばれ、宮域内なる予備の御井たる下の御井に対して、上の御井とも稱え、今は豊受大神宮の所管の社として、御井の神を奉祀しているのである。

井戸は古来水を得るものとして大切にされてきた。太古の人々が生活を営むにあたって必要なものだったのである。同時に神聖視され、聖なる場所としてまた土地の神として祀る対象となっていたことが窺える。そして後世になってもそれは引き継がれているのである。

地表の三分の二を海におおわれる地球は水満ちる惑星。

水惑星ともいいます。

水は地球のあらゆるところに存在し

あらゆる生物を潤します。

天から地をめざして降り落ちるので

天津水、天水とよばれ…、しだいにあまみとなまり

“あめ”という言葉になったといえます。

雨は天からの授かりもの一。

そして稲作にも不可欠なもの一。

御井に降り注ぎ御饌として神に捧げられます。

御饌都を祀る外宮の森の奥、

天に繋がる聖なる水が湧く井戸があります。

豊受大神宮にて、立春の日よめる

おしほいをけふわか水にくみそめて

御あへたむくる春はきにけり

度会家行『風雅和歌集』

奈良東大寺のお水取りは、春の到来を告げる行事。

三月十二日深夜、若狭井から香水が汲みとられ本尊の十一面観音に供えられます。

この井戸は若狭の国音無川と繋がっており聖水とされています。

ふるさとの風
平成三十年 睦月
—御水—



【参考資料】

- 「止由気宮儀式帳 神道大系神宮編1」 神道大系編纂会 L170/シ/1
- 「神宮雜例集 神道大系神宮編2」 神道大系編纂会 L170/シ/2
- 「外宮さんを知るための二十のことば」 石垣仁久/著 外宮参道発展会 L174/イ
- 「伊勢神宮の衣食住」 矢野憲一/著 東京書籍 L174/ヤ
- 「伊勢神宮（別冊太陽）」 平凡社 L174/イ
- 「風雅和歌集卷第十九 新編国歌大観第一卷勅撰集編」 角川書店 R911.10/シ/1
- 「神境紀談 増補大神宮叢書16 神宮随筆大成後編」 吉川弘文館 L174/ダ/16
- 「毎事問 増補大神宮叢書15 神宮随筆大成前編」 吉川弘文館 L174/ダ/15
- 「大神宮史要」 大西源一/著 平凡社 L174/オ
- 「宇治山田市史上巻」 宇治山田市役所 L243/ウ/1
- 「井戸 ものと人間の文化史150」 秋田裕毅/著 法政大学出版社 518.1/ア
- 「神宮祭祀の研究」 中西正幸/著 国書刊行会 L174/ナ
- 「自然と神道文化3 水・風・鉄」 財団法人神道文化会 弘文堂 170.4/シ/3
- 「瑞垣238号 平成29年秋季号」 神宮司庁

図書館だより1月号 No.191 増刊 ふるさとの風 睦月 平成30(2018)年1月5日発行

(編集・発行) 伊勢市立伊勢図書館 指定管理者/株式会社図書館流通センター (住所) 〒516-0076 伊勢市八日市場町13-35
(電話) 0596-21-0077 (FAX) 0596-21-0078 (ホームページ) <http://iselib.city.ise.mie.jp/>

© 2018 mami ishikura